

アトリエ 琉游舎 だより 30号

2018年7月5日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

もうすぐ夏休み

○関東地方は6月のうちに梅雨明けとなってしまいました。季節の変化が前倒しになっているような気がするの、気のせいでしょうか。夏休みが来る前にホントの夏の盛りが過ぎてしまわないことを願うばかりです。

○さて、琉游舎の夏休みは去年同様なので、昨年の4号のお知らせを再録します

- ★学校に通っている皆さんもうすぐ楽しい夏休み！ 😊
- ★でも夏のドリルや日記や自由研究をやらねば、タイヘンダ 😱
- ★家にいるとテレビやゲームの誘惑があるし、どうしよう 😞
- ★そうだ琉游舎に行こう！ 👍
- ★あそこは涼しいし、テレビがなくて静かだし 本も冷たい麦茶もあるようだ 🙌

○ということで夏休みが待ち遠しい皆さんお待ちしています。

また朝夕の散歩の一休み、熱中症予防にぜひ琉游舎にお寄りください。

読書会 7月10日(火) 途中からの参加でも大丈夫。大きな声で読むお経健康法の後に、雄大で宇宙的な13時半から**7月24日(火)** 仏教物語を分かり易く読み解いていきます。テキスト用意してお待ちしています。

写経会 7月8日(日) 今回は
13時半から 第2日曜日です

詩話会
7月14日(土)13時半から

映画会 8月9日と16日は
毎週木曜日13時半から お休みします

7/12 木	13時半	ハムレット (153分)	ローレンス・オリヴィエ主演、1948年アカデミー賞作品賞・男優賞などの受賞作品。 シェークスピア文学の最高峰「ハムレット」の映画化。
7/19 木	13時半	運が良けりゃ (91分)	山田洋次監督、ハナ肇、倍賞千恵子主演。天明の大飢饉に見舞われて貧しかった 長屋住まいの人々の四季織り交ぜ綴る落語長屋の人情喜劇。
7/26 木	13時半	エデンの東 (118分)	エリア・カザン監督、ジェームズ・ディーン主演。新人だったディーンはこの主役で 一躍時代の寵児となり、その名演は映画史に永遠に刻まれる。
8/2 木	13時半	吹けば飛ぶよな男だが (91分)	山田洋次監督、なべおさみ、緑魔子主演。やくざなチンピラが家で娘と出会い 純粋無垢な愛に触れる。裏社会の人々を描いた監督異色作。

8月9日 (木) 16日 (木) は映画会をお休みにします。

8/23 木	13時半	理由なき反抗 (111分)	ジェームズ・ディーン主演。後世に大きな影響を与えたディーンの名演。 荒ぶるティーンエイジャーをディーンが極限まで演じきった名作映画。
-----------	------	---------------	---

自筆の手紙というものを綴らなくなって、もうどれくらい経つでしょう。私は礼状や、年賀状に一言書き添えるだけで、自筆の手紙を綴った記憶がもうこの30年近くありません。パソコンで打ってそれをプリントアウトするか、メールで送るかのどちらかです。下手な字で何度も何度も書いては直し、勇気を出して送ったラブレターはもう過去の遺物なのでしょうか。単なる連絡の手段であればメールで充分です。切手代も便箋代もかかりません。連絡はワンウェイの事務的な手続きの一つなので、一方的にこちら側の言いたいことを言って、それに対して「いいね👍」を連発してもそれはコミュニケーションとは言わないでしょう。単なる「聞いたよ」とか「見たよ」以上の意味はありません。コミュニケーションとは送り手側の伝えたいことに、共感したり感謝したり、あるいは反発したり反論したり、というそのやり取りの中で初めて成立するものだと思います。

「満月のごとくなるもちゐ二十 かんろのごとくなるせいす一つつ 給候い畢んぬ、春のはじめの御悦びは月のみつるがごとく しをのさすがごとく 草のかこむが如く 雨のふるが如しと思し食すべし。」これは日蓮聖人が弟子の四条金吾にあてた礼状の冒頭です。「満月のようなもち二十 甘露の清酒を一筒頂きありがとうございます。新春の悦びは月や潮が満ちる時、雨が降って草木が芽生える時のようにめでたいことと思ひ頂きます。」とお礼を述べた後、お釈迦様の生誕以来の吉事を述べそして弟子の信仰の厚さを「恐れながら尊いことです」とほめたたえています。便せん一枚程度の短い手紙のなかに、日蓮聖人の感謝と喜びの気持ちそして弟子・旦那との信頼関係と交流が生き生きと綴られています。

鎌倉時代の祖師、日蓮聖人や親鸞聖人が信者との間に交わした多くの自筆の手紙が、今に多く残されています。そこには、お礼だけではなく弟子たちの仏法上の疑問に答える返事であったり、現実の生活と信仰の板挟みに遭って悩む弟子・旦那たちを、時には易しく時には厳しく教え諭す祖師たちの姿が生き生きと描かれています。時間や距離などがコミュニケーションにはさして障壁でないことがその手紙を読むとよく分かります。どうしても知りたいこと、解決したいこと、感謝したいこと、意見したいことなどは、距離を超えて時間を超えて、そして時代を超えて現代にまで伝えられているのです。この手紙の数々を読むと、人は何に喜び怒り哀れみ楽しむか、時代を超えて変わらないことがよく分かります。そのような手紙の中でも、特に興味深いのは頂き物に対するお礼の言葉です。祖師のように新しい仏教思想を確立した人でも、当たり前のことですがまずは頂いたことに喜びと感謝の気持ちを表しています。数を数えたことはありませんが日蓮聖人のお手紙の相当数の冒頭はまずはお礼から始まります。お酒の贈物が多かったようで、冷え切った体の中にお酒が入っていく様子を「汗に垢を洗い、零に足をすすぐ」ようだ何とも不思議な形容をしています。故郷勝浦の海を思い出すような「生わかめ 青のり」そして貨幣経済がやっと発展し始めたこの時代に欠くことの出来ないお金、米・味噌・麦など沢山頂いています。

徒然草の一節に「よき友三つあり 一つには物くるる友 二つには医師 三つには知恵ある友」とあります。以前「善知識＝よき友」についてお話ししましたが、まさしく日蓮聖人とその弟子・旦那衆は「よき友」でもあったのです。一方が与え、もう一方が与えられるという一方通行ではなく、お互いが持っている物を与え合う関係です。信者たちは物を持たない日蓮聖人に物理的な物を与え、逆に聖人は信者の悩みを解決する処方箋を心の医師として信者に与えています。そのバックボーンとなる基本がお釈迦様の「智恵」つまり「教え」なのです。この3つをお互い与え合う関係が善き友であり「善知識」です。仏教はお釈迦様の時代も鎌倉時代も、信者と仏祖や祖師たちとの、双方向のコミュニケーションの積み重ねの上に今ここにあるのだと思います。800年近い時空を超えて今に残されている自筆の手紙たち、最初は1対1のやり取りであったコミュニケーションの手段が、今では何千、何万という人の共通の手紙となっています。もちろん紙と墨文字が残されているという文化財的な価値に意味があるのではなく、そこにやりとりされたコミュニケーション内容の切実さと深さが現代に生きる私たちにも共通の切実さと深さをもって訴えかけてくるものがあるからなのです。

「文字を書く」という言葉はあと何年ほど生き残ることができるでしょうか。私にとってはすでに「文字は打つ」ものになっています。「書け」はその時の精神や肉体の状態がそこはかとなく文字に現れてくるものなのでしょうし、文字には書く人の個性や知性にもにじみ出てくるのでしょうか、残念ながら悪筆の身である私はもう自筆には戻ることができません。文を「綴る」ことは「行い」の実践の一つであり、読んでいただく人たちへのラブレターでもあると考えます。「打つ」文字がどこまでラブレターの役割を果たすか、はなはだ心もとないことですが、素直に、意柔軟に、分かったことは

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

Mail:toi101izuru@outlook.jp

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

(出琉)